

### 歌舞伎の〈見得〉用例集（未定稿）

1. 本資料は、2016年12月3日（土）に行われた藝能史研究会東京大会シンポジウム「歌舞伎の〈見得〉」に際して、パネリストが配付した、各種資料からの見得の用例の抜粋である。
2. 当日配布を目的として作成したもので、『藝能史研究』特集号に掲載するには粗雑の感があるが、今後の考察を進展させるには有用な情報を含むと考え、PDF ファイルをWEB上に掲載することとした。
3. 校正は不十分であり、書式も整っていない未定稿であるので、利用の際は原資料をご確認いただきたい。外字は■で示している。
4. 用例集の内容は以下のとおりである。

#### ○武井協三

- ・追加資料①「見え」の用例 ..... 001
- ・追加資料②仁王・不動などの真似 ..... 005

#### ○岩井眞實

- ・用例（劇書類） ..... 006
- ・台帳の用例 ..... 008
- ・「幕」の用例 ..... 009

#### ○和田修

- ・『歌舞伎台帳集成』ト書の〈見得〉記事 部分抄出 ..... 010

以上

## 追加資料① 「見え」の用例

・評判記の用例は『歌舞伎評判記集成』二期による。ただし同書の全ての用例を拾ったわけではなく、一部のみにすぎない。

「見へ」「見え」↓「見かけ」「見え方」「外見」「容貌」「姿形」「ポーズ」

「見<sup>みえ</sup> 何となく見物への見へよきをいふ」(『傳奇作書』『新群書類従』第一巻66頁)

1『役者紋楊口(弓射)』坂・中村新五郎 元文三年(1738)Ⅱ①二五二

はん花へ来たり、あれ程<sup>しほ</sup>吝こといはるゝ気ならば、内が思ひやられて、徳兵へが家出も断じやと存る、内ではしまつも、随分精出<sup>せい</sup>していはるゝがよいが、外では余りできたとは申されぬ、「太<sup>た</sup>弥次」いかにもよいお気の付ケやうながら、それが狂言の見へといふ物に、態<sup>わざ</sup>となさるゝ

2『役者桃埜酒』坂・中村宗十郎 寛保三年(1743)Ⅱ②三一九

仁木弾正の役 大場にて見へよし

3『東都劇場沿革誌料』198頁

『仮名手本忠臣蔵』は……寛延元(1748)八月十四日初日……此時の番付を左に写す

……人形役割……ゑんやはんぐわん 吉田冠蔵

……吉田冠蔵、塩谷判官の人形つかひたるとき……しばらくのほどはさしうつむき、默然たるものゝ、俄に怒を顕すゆへに、其見へ格別に珍重なり

4『役者懷相性』江戸・市川升蔵 宝暦四年(1754)Ⅱ⑤五〇

次に春狂言には五郎の役致さすべしと、栢庭の見物へ引合に付、五郎のにらみけいこの段は、初ぶたいにしては いかふ見へよし。春の五郎の役で大当りを待ますぞいの。

5『役者懸想文』京・中村十蔵 宝暦六年(1756)Ⅱ⑤三四六

のとの守のり経と成、四ばんめに能狂言ゑぼし折りに似たる出端「わる口組」めいよ此人は出端に見へをせらるゝ、太郎冠者を連れ はやし物のあしらいにて、おどつて出るとは 若い立役の事、いやおとなげない、ようもはづかしい事じや

6『役者談合膝』江戸・市川升蔵 宝暦九年(1759)Ⅱ⑥四二五

第二ばんめは二役伊藤九郎と成 家来十内を打擲して 川津のさいごを残念がる仕内、見へよし

7『役者談合膝』江戸・津山友藏 宝暦九年〈1759〉Ⅱ⑥四三六  
赤星が悪を願はす仕内 見へよしく

8『役者談合膝』江戸・坂東彦三郎 宝暦九年〈1759〉Ⅱ⑥四三七  
次に源藤太にたばかられ、箱に釘を打 調伏の科人と成 なんぎする仕内 よはすぎて  
見へよしく

9『役者談合膝』江戸・中村歌右衛門 宝暦九年〈1759〉Ⅱ⑥四三九  
今やうの仕内を見るに、実悪といふも敵役といふも、諸見物への見へ計して、はねをと  
らん為、皆仕内半道をまぜたり

10『役者談合膝』坂・中山文七 宝暦九年〈1759〉Ⅱ⑥四六六  
さやにて碇をはなし、其碇にのつてあがる仕内「しさい者出」是は狂言とは云ながら  
人を馬鹿にせし仕内、我等はのみ込むぬぞ「頭取」それは狂言綺語なれば とかく見へ  
の面白いがよいとおぼしめせ。

11『役者談合膝』坂・竹田与市 宝暦九年〈1759〉Ⅱ⑥四七六  
「頭取曰」何と仰せられても、仕内口跡見へ共打そろふたは与市殿

12『役者段階子』坂・桐山紋治 宝暦十年〈1760〉Ⅱ⑦六九  
ぜひなくまたのゝ五郎となのならるゝまで、少シばかりなれ共 大ぶん見へよく珍重く

13『役者段階子』坂・芳沢崎之助 宝暦十年〈1760〉Ⅱ⑦七三  
「頭取曰」されば小功を賞ぜざれば 大功立ずと申、其見へうつりのあしい所を、よく  
仕内でこなさるゝを上手と申す

14『役者今川状』京・榊山四良太郎 宝暦十四年〈1764〉Ⅱ⑧一八四  
「さじきより」此間の仕様 ねから見へにかまはず、狂言をまつすぐにしらるゝは古風  
にて、去りとは面白い事く

15『役者闘鶏宴』江戸・坂東彦三郎 明和二年〈1765〉Ⅱ⑧三二九  
次にてるてをおふいて芥川の見へ もじ▲太夫上るり所作事迄

16『役者闘鶏宴』江戸・中村島五郎 明和二年〈1765〉Ⅱ⑧三三二  
かしわはうまし たかふは見へよし

17『役者闘鶏宴』江戸・嵐ひな治 明和二年〈1765〉Ⅱ⑧三三五  
雛殿はてるて 時宗とあくた川の段 見へよし

18『役者年内立春』江戸・坂東彦三郎 明和三年〈1766〉Ⅱ⑧四二三

この度は渡部の綱にて、廣文美女御前を引立行所へ、足駄傘にて出、戻橋の見へよし

19『役者年内立春』江戸・沢村喜十郎 明和三年〈1766〉Ⅱ⑧四二七  
次に美女御前を負ての押出し 見へよし

20『役者年内立春』江戸・沢村金平 明和三年〈1766〉Ⅱ⑧四三四  
幕明十二段の見へよし

21『役者年内立春』江戸・市村羽左衛門 明和三年〈1766〉Ⅱ⑧四三五  
琴を立て滝にして耳を洗ふ 許由宋夫の見へよし

22『役者党紫選』京・中山文七 明和五年〈1768〉Ⅱ⑨七九  
とかく見へをおもにせらるゝ様に見へる

23『役者花鼎』坂・沢村国太郎 明和六年〈1769〉Ⅱ⑨三四〇  
一駄が見へを好まず 場当りをせず

24『役者いろく有』江戸・坂東三津五郎 明和八年〈1771〉Ⅱ⑩二〇二  
鷹鶴を取て 亭の内へ入ルと 羽織着流シにて 左りに鷹を居 右にて鶴をおさへ 上  
ゲ障子よりの出端 先見えよし

25『役者いろく有』江戸・坂東彦三郎 明和八年〈1771〉Ⅱ⑩二一三  
近江の小藤太と成、狩場の絵図と、善光寺の絵図を持、八わたと兩人出らるゝ所、是も  
対面の様にて見へよし

26『役者いろく有』坂・市野川彦四郎 明和八年〈1771〉Ⅱ⑩二二一  
後かけ付て其場をさばく迄 とかく見えようて いしやうにお氣がはります

27『役者いろく有』坂・坂東又太郎 明和八年〈1771〉Ⅱ⑩二二二  
べつと此場 見へはよいが 訛り故か、言葉に力所が兎角

28『役者いろく有』坂・市山助五郎 明和八年〈1771〉Ⅱ⑩二二二  
こづれも見えがよふござり升ぞ

29『役者いろく有』坂・中村歌右衛門 明和八年〈1771〉Ⅱ⑩二二三  
扱二つ目梅園中将の役「芝居好」見へはあつた物ではないぞ

30『役者いろく有』坂・中村歌右衛門 明和八年〈1771〉Ⅱ⑩二二三  
「頭取」住吉の神前、まはり道具にて 社人の姿にて取まかれ 後淡路のやかたにての  
荒事、実悪の見へ第一 吾妻の立テものにつゞいて、これほどのお方もあるまじく存ます。

31『役者いろく有』坂・中村新五郎 明和八年〈1771〉Ⅱ⑩二二四  
二つ目山中辰五郎役 見へもぐつとよふござります

32『役者いろく有』坂・姉川大吉 明和八年〈1771〉Ⅱ⑩二二五  
五つ目こしもと役 見えもよこさり升ぞ

33『役者物見車』坂・中村歌右衛門 明和九年〈1772〉Ⅱ⑩四四六  
しいに大切にて取かこまれるまで見へもよし

34『役者物見車』坂・坂東岩五郎 明和九年〈1772〉Ⅱ⑩四四六  
四ばんめ北条氏直の役 見へよし

35『役者物見車』坂・姉川菊八 明和九年〈1772〉Ⅱ⑩四四八  
三つめ次に道行ともに見へがようござるぞや

36『役者物見車』坂・榊山千菊 明和九年〈1772〉Ⅱ⑩四四九  
千菊殿は……草履取袖介の役 見へもよし

37『役者物見車』坂・中山来助 明和九年〈1772〉Ⅱ⑩四四九  
序の切 憲法騒動のかけ付の場 見へもよし

38『役者物見車』坂・市野川彦四郎 明和九年〈1772〉Ⅱ⑩四四二  
三つの首の血を紅葉にそゞぎかけて 術をくちくまで見へもよし

39『御撰勸進帳』安永二年〈1773〉江戸・中村座  
『歌舞伎台帳集成』第30巻311頁 和田修氏資料による)

団十郎 雄次郎 門之助 やみなんく  
ト是より流しになり 正面の山幕を引き上ると 真ん中に団十郎 石の不動の見へ  
左右に雄次郎門之助 金伽羅制夕迦の見へにて押し出し 太鼓打上げる

40安永四年〈1775〉上演の「初冠賤束帯」について『義多百景』に「**軍冠**に装束にて、障子け放しての見へ大きくてよし」とある(『義太夫年表近世篇』一卷475頁)。

41安永六年〈1777〉上演の「糸桜本朝育」について『義多百景』に「糸やの母妙閑、綱五郎の身の上を聞、次二わざと知らぬふりにての見へ面白事く」とある(『義太夫年表近世篇』一卷503頁)。

42天明元年〈1781〉上演の「時代織室町錦繡」について『闇の礫』に「冠蔵、嘉平治・道三など出来ました。しかし道三はあまり腰がかゞみ過て、ちと見へがいかゞしくなれども、こよい事く」とある(『義太夫年表近世篇』一卷570頁)。

## 追加資料② 仁王・不動などの真似

1『野郎役者風流鏡』（江戸）・村山平十郎 貞享五年（1688）Ⅰ①二七七

平十郎浅草のくはんおんゑさんけいの時 仁王門のきわに立よりしを見るに いづれを  
仁王、いづれを村山と見ちがへたりといふ人有

2『古今四場居色競百人一首』（江戸）・村山平十郎 元禄六年（1693）Ⅰ①四七三

八王寺からからたをになつたまめぞうめが見てもさ生仁王とほざいたは ちがいはおり  
ない

3『古今四場居色競百人一首』（江戸）・市川段十郎 元禄六年（1693）Ⅰ①四七七

れいのおそろしき玉がん 一きわ又あつはれと詠る 其身にしていき物とは よくつゞ  
けた そゝりも時にとりてのどうけまきれ 日本人よつて いき不動仙人 あら仁王開帳  
せしむる物なり

5『役者談合膝』（江戸・江戸名物市川海老蔵 宝暦九年（1759）Ⅱ⑥四五三

五十年ン来の諸役仕内 挙てかぞへがたし、あらましかいつまみて申さば、あかんべい  
おだんの女形、新田四天王の四役の内、わたり新左衛門のどうけ事、鬼童丸の大悪人等、  
其外形象となつては 不動ノ愛染明王、鍾馗、達磨、関羽、閻魔、三浦ノ大助、和田ノ  
義もりの親仁方

6『役者闘鶏宴』（江戸・沢村宗十郎 明和二年（1765）Ⅱ⑧三二八

少将に惚られ石なげの思ひ入、敵大ぜい追ちらし、はだし馬のまく。切々此様な強い五  
郎は外にないぞ。

7『役者いろく有』（江戸・市川団十郎 明和八年（1771）Ⅱ⑩一九四

「頭取曰」遠国はしらず、御当地近郷まで 嬰子生れてト、カゝを覚る比、団十郎はと  
問へば 手を上ケ口を明き眼をいからす

8『役者いろく有』（江戸・松本幸四郎 明和八年（1771）Ⅱ⑩一九六

第一番目に時宗ひりき成をなげき、愛染明王の木像をいのれども しるしなきをむねん  
に思ひ、火中へなげ入レし時、幸四郎明王の尊軀にてあらはれ出 時宗に力を授けらるゝ  
所、さすが親だまゝ

## 用例

① 『続耳塵集』『役者論語』（寛延二年「一七四九」以前カ）

むかしの役者は揚まくより出端を大事にせし事也。出てむかふを切るに、各その風情流儀あり。其出る時、はや名人と思はれ、其狂言もしつかりとおもしろく有しとかや。三原太夫といへる敵役は、小男成しに長き大小をさし、出端にきつと表を切り、扱ねりあるく所大きに見え、恐ろしかりし也。今は出端に流儀なし。これも時にしたがふ故ならん。『歌舞伎十八番集』岩波旧大系、三四九頁）

② 『役者名物袖日記』（明和八年「一七七二」）

此大太刀・小扇は、古団十郎「二代目」より持はじめ、今にいたり壱番目大詰打出し際につめ役者を大勢つまかさね、此扇をつかひ白眼見へとする。あらごと役者の道具なり。

（日本庶民文化史料集成・第六卷、二五一頁）

鳴見五郎四郎くせ身振

「…」ちから足を二足ふんで手を上げ、ふるへておろすミへ。

古中嶋三甫右衛門くせ身振

右の手を右のわきへおしあて、ひだりの手を前へつき出し頭をふつて見るミへ

（同、二五二頁）

柏庭名人なれ共狂言作りし事をきかず。其かわりに我一分のせりふみへなる事は、自分の才智をもつて作り、当りをと「…」

（同、二五九頁）

③ 『古今役者論語魁』（明和九年「一七七二」）

江戸見物の細とかけ声のある処は、見へにして、勿論の仕内と知るべし。

（『近世芸道論』岩波・日本思想体系、四七六頁）

白眼前に目を閉て、にらむ時に開ば、はつきりと別也

（同、四八三頁）

④ 『増補戯場一覽』（寛政十二年「一八〇〇」）

すぎ合方 「伊賀越乗掛合羽」伝法や 宿屋の段

唐木政右衛門 初 中山文七

手水鉢よりへび出るをあやしき、きつとなるみへにて水気立つ所にてあり。

△鳴り物 三味せん。早き調子の合方なり。

（日本庶民文化史料集成・第六卷、四一四頁）

⑤ 『芝居乗合話』（寛政十二年「一八〇〇」カ）

其時「二代目団十郎の」景清思わず「揚幕際から舞台の重忠「助高屋高助」沢村宗十郎」を」振かへりて見へある

（日本庶民文化史料集成・第六卷、二九一頁）

⑥ 『絵本戯場年中鑑』（享和三年「一八〇三」）

和哥 詰合の幕きりに、立役・敵役よろしくならひ、「かた／＼さらば」といふ時、此和哥を打。

片シヤギリ 和哥の跡にて、役者キツト見へになると片しやぎりをう

ち。

『芝居年中行事集』国立劇場・芸能調査室、一九九頁)

⑦『芝居訓蒙図彙』(享和三年「二八〇三」)

○見へ 「見物に見へよきかたちをいふ。「かた%参れ」「まづ入らせられませふ」などの時、かたち改むるなり。是をいふ。また、刀をかつぎてにらみ、チョン／＼、ぶん廻しなど、いづれも見へのかたちなり。(「正本通言並に狂言通言」の項)

(『劇場訓蒙図彙』国立劇場・芸能調査室、五九頁)

⑧『客者評判記』(文化八年「二八一」)

アノ八兵衛がすることはいつ見ても心もちが能、あの位におしのきく顔はあるめへ、ギツクリとにらむ見えのよさ、首をグイとすゑてにらんだ所は、地から生た様だ、

(日本庶民文化史料集成・第六巻、五〇一頁)

太郎兵衛と来ては大きいのはねへ、あれは別物だ、おなじ大詰でも山台に登つて右へ持た刀を左へ持替て、ト弓手にして右の臂を突張て、おろしながらの見えは大きいぜ、

(同、五〇二頁)

⑨『芝居秘伝集』(成立不詳)

白猿、団蔵は六部と順礼にてせり出し、此の中へ条三郎、一寸信田妻の見え「名歌徳三升玉垣」四段目だんまり」

(日本庶民文化史料集成・第六巻、七二五頁)

〈参考〉「名歌徳三升玉垣」四立目・六道辻の場

「…」六人宜しく引張り、しやんと見得「…」ト見得に成、是より詔への鳴物になり大立「大立廻り」有て、とゞ皆々逃げて這入。

市川白猿Ⅱ日本廻国修行者幡龍、実は大伴の黒主  
市川團蔵Ⅱ西国巡礼正直庄兵衛

『歌舞伎脚本集』岩波・旧大系、九〇〜九一頁)

ツケの用例

○「続耳塵集」(『役者論語』安永五年「二七七六」)

立合あるひは太刀打の時、かげを打とて大きな拍子木にて、ぐはた／＼とた／＼。むかしはか様の事はなし。或は龍をつかふか、鬼神など出合ふ時には、た／＼きならせり。始には物陰より打ならせし故、かげ打といふならん。今はかげ打者、舞台へ出て打ゆへ、田舎人はあのやかましく打人は何の為じやと心得ず、当地の見物夫に答へて、アレハ役者のはたらく音の心也といへば、役者の手足がはたらくと、あの様に鳴はいかなる事とて、いよ／＼がてんせざりけり。されば今は聞なれたれば、かげ打ねば役者も見物も淋しく、同じくは見物に隠して物かげより打たきもの也。

『歌舞伎十八番集』岩波・旧大系、三五〇〜三五一頁)

○雑俳

をとたかし 荒身の太刀の 土壇打(「俳諧媒 口」元禄十六年)  
やかましや 金平さわぐ いづみぶし(「俳諧ちゑぶくろ」宝永六年)  
やかましや とりの芝居 鬼の出端(「俳諧ちゑぶくろ」宝永六年)  
(いずれも『元禄江戸雑俳集』(雑俳集成2) 東洋書院、一九八四年)



# 台帳の用例

①「信徳丸Ⅱ柏」(享保十二年「二七二七」)七月、京北側西之芝居

造り物 一面の松原「…」幕の内より 小柳 可平 「三郎助」源八  
侍三人切合 此見へにて幕開く ト両方へ別れ(集成1、二八一頁)

ト是より鐘の仕合に成り 双方鐘を打落し 「小四 新四」兩人刀を  
抜き しやんと切合す 見へに成り チョン／＼  
返し 道員廻る(同、二九八頁)

ト言ふと「助五」浦助又中からぬつと出る 「宗三 嘉左」兩人見付  
ケ おのれはと言ふと 「助五」浦助飛んで出 南無三宝し過しじや  
と言ふて 向ふへ走ッては入ル 「宗三 嘉左」兩人あきれた顔する  
此見へ宜しく

(同、三三五頁)

幕

ト「新四 小四」抜き合せ立廻り 見へにて留る (同、三五七頁)

②「大塔宮Ⅱ鎧」(上演時不詳。享保八十六年「二七三三」三二)カ)

ト是より早笛に成 大立いろ／＼有て 皆／＼を追込 早笛留り  
赤松よろしく急度見へ有て(集成3、三八頁)

ト風の音して看板の瓢箪動く 兩人跡すさりして急度見へ

(同、四六頁)

③「卅三年忌袂白絞」(元文五年「二七四〇」)一月、大坂中の芝居

男 合点しや

ト見へある 所へ十蔵(半平) 富十郎「お染」を連れ出テ  
(集成4、一一六頁)

④「鳴神不動北山桜」(寛保二年「二七四二」)正月、大坂大西芝居

皆々「早雲王子・絶間ほか」見合 見へよく並ぶ(同、一三三頁)

⑤「傾城室町桜」(寛保三年「二七四三」)一月、京四条北側東角大芝居

「大勢」 とつた

ト色々立廻りあり 見「得」よし 「幕切れ」(集成5、三六頁)

⑥「菊水由来染」(寛保三年「二七四三」)三月、大坂大西芝居

ト小平次「権平」新九郎「市蔵」に切掛ける 引つ外して見へ有て 新  
九郎ヲ当てる 「…」新九郎ヲ見ると次郎三「忠太」十蔵に切り掛け  
る 少し見へ有て十蔵ヲ当てる 十蔵伸る「…」(同、一三九頁)

⑦「昔形吉岡染」(延享元年「二七四四」)十二月、大坂中の芝居

ト行かふとする すこしみへ 十蔵「正素」竹刀を取り次郎三「源蔵」  
を打伏せ(集成6、一六二頁)

⑧「二月堂暁鐘」(延享三年「二七四六」)三月、大坂中の芝居

ト覺期して飲ふとスルを三十郎「専助」茶碗を取 打付ける きつとみ  
へ(同、四三〇頁)

## 「幕」の用例

### ○「幕」＝揚幕

はかまの折めたる敷まく切て出るより座中しづまつて（藤田小平次「難波の

＝伊勢の白粉」天和三年「一六八三」、1180）

まくをきつてのはしがゝり（市川団十郎Ⅰ「役者大鑑」元禄八年本「一六九五」、2030）

まくをあげつ、はしがゝりゝ出らるゝ（山下才三郎「万年暦」坂、元禄十三年「一七〇〇」、2573）

幕おし切てふり出したる有さま。もと本間ごとより。わり出したるげいしやなれば。わるからふ筈もなし。（中村七三郎「万石船」江、元禄十四年（一七〇一）、3146）

さつと幕をひらき出らるゝ体、大がらにして、いぢのわるさうな顔付よろし（森山十の右衛門「二挺三味線」京、元禄十五年「一七〇一」、3313）

### ○「幕」と暫

はしがゝりのまくの内より、しばらく／＼とよびかける所、声も能<sup>よ</sup>にて古市

川に其儘（中嶋勘左衛門「座振舞」江、正徳三年「一七一三」、5196）

例のゝとく幕の内より、しばらくとゝゝゝあかけしづかゝ出て、先諸見物ゝゝ例有て本づたいゝゝかゝり（市川団十郎Ⅱ「三蓋笠」江、享保五年「一七二〇」、7470）

### ○「幕」を「引く」

「早太まくひきやれと、〔猪野早太役・松本〕小四郎殿に拍子木うたさるゝ所珍敷作意大でけ〔…〕それは去年〔宝永三年〕竹嶋正月の顔

みせ〔京・竹嶋幸左衛門座〕に、千弥殿敵を討んとあせらるゝを、頭取あだち殿が引とめ、こな様の芸はいかい事なされた、又跡に顔みせする衆が有、よいかげんにしてかくやへはいり給へと、拍子木打て幕引れし格」（村山平右衛門、宝永四年度江戸中村座顔見世評「友吟味」京、宝永四年「一七〇七」、4128）

養子の竹嶋殿切腹の時、うしろより刀もぎ取てほり出し、門へ取に出し時、親子の縁切た、どこへなりと行<sup>ゆけゆけ</sup>と、まく引ての中入（村山十郎兵衛「願紐解」坂、正徳六年（一七一六）、6092）

上人たへまの内侍におもひこがれ、僧ぎやうかはつて天じやうする時、太刀にそりうちぎせいの幕引大々あたり（萩野伊三郎「拳相撲」江、享保十一年「一七二六」、9210）

### ○「幕切れ」（マクギレ／マクギリ）

去秋<sup>ふたへおび</sup>二重帯に宗十郎殿宇源次殿あほうばらひの時、わざとてうちんをけし刀をぬかるゝ時、兩人首指<sup>さし</sup>のべらるゝを、さやより小判をばら／＼と出さるゝ幕切大評判（竹嶋幸左衛門「色茶湯」坂、享保二年「一七二六」、6351）

石灯籠を指上の荒事見事／＼、いつとても此幕ぎれにてあたりをとりれずといふ事なし（市川團藏「三蓋笠」江、享保五年「一七二〇」、7474）

### ○「幕」＝Scene

山だち共を取つたゝあはして、石地藏をあふてかへらるゝ幕あたりました（片山小左衛門「噂風呂」京、享保六年「一七二二」、8131）

## 『歌舞伎台帳集成』 ト書の＜見得＞記事 部分抄出

作成：和田修

## 【凡例】

- 第8巻までは全作品を略読して、ト書の中から＜見得＞に関連する用例を拾った。＜見得＞に関する記事のない作品は取り上げていない。ただし、気になる作品はメモを付けたものもある。
- それ以降は、上方の時代の古い作品（宝暦以前）と江戸の作品のみを確認した。江戸の作品で見得の記事のないものは注記した。
- 「御摂勸進帳」の本文は岩波新日本古典大系本によった。
- 原則として台帳集成および新大系の校訂に従った。ただ＜見得＞については原本表記に戻した。また校訂者による宛漢字は原本表記に戻したところがある。一字アキは適宜削除した。役名・役者名の補いも重複の場合は省略した。
- ＜見得＞以外の記事も若干含んでいる（下線表示）。
- コメントは※印で記した。

## 第1巻

◆「信徳丸三柏」享保12年7月 京北側西之芝居 名代亀屋久米之丞 座本松島兵太郎

## ○上の巻

- 造り物 一面の松原 … 幕の内より 小柳 可平〔三郎助〕源八 侍三人切合 此見へにて幕開く ト両方へ別れ (P.281)
- ト是より鍵の仕合に成り 双方鍵を打落し〔小四 新四〕兩人刀を抜き しやんと切合す 見へに成り チヨン／＼返し 道具廻る (P.298)
- ト言ふと〔助五〕浦助又中からぬつと出る〔宗三 嘉左〕兩人見付ケ おのれはと言ふと〔助五〕浦助飛んで出 南無三宝し過しじやと言ふて 向ふへ走っては入ル〔宗三 嘉左〕兩人あきれた顔する 此見へ宜しく幕 (P.325)

## ○中の巻

- ト〔新四 小四〕抜き合せ立廻り 見へにて留る 内より内にて 御上使 (P.357)

## 第2巻

◇「傾城妻恋桜」享保17年1月 京都早雲長太夫座二の替り

## ○上之口明

- 右のたて一所に成ル 宜敷御しくみ幕 叶 (P.54)

◆「芦屋道満大内鑑」享保20年2月 京都南側西角大芝居 名代都万太夫 座本中村富十郎

○四段目奥

- ト乗物橋掛りへかき行と 橋掛り くわた／＼にて 七五郎〔与勘平〕奴の形にて走り出て 棒端つかみ これや／＼とつき戻す 六十郎〔左大将〕やれ／＼とあせる 又つき戻す 立入式三度ありて (P.307)

◆「山椒太夫五人」享保20年12月 大坂大西の芝居 名代松本名左衛門 座本中村十蔵

○三ノ詰

- トおの／＼ ひつはり よろしく  
幕 (P.445)

○四ノ口結

- ト下家へは入 大五郎〔高八〕続いては入らふとする 兵吉〔植竹〕廻り壁より出 大五郎〔高八〕を連理引にて留る事有て トド大五郎〔高八〕うんどこける 兵吉〔植竹〕消へる (P.453)

○五段目大切

- ト皆／＼〔対王 熊五郎 小八 家来〕 ばた／＼にて向ふへは入 (P.473)

第3巻

◆「大塔宮」上演時不明（桐野谷権十郎が出演したとすると、初演の享保8年以降、没年の享保16年以前）

○二ノ詰

- ト是より早笛に成 大立いろ／＼有て 皆／＼を追込 早笛留り 赤松よろしく急度見へ有て (P.38)

○小幕

- ト風の音して看板の瓢箪動く 両人跡すさりして急度見へ  
こぶ 蚊屋 ハテ怪しや  
ト雲気の合方に成 (P.46)

第4巻

◆「卅三年忌袂白絞」元文5年1月 大坂中の芝居 名代塩屋九郎右衛門 座本中村十蔵

○三ッ目

- 右之見へにて幕引く 歌 (P.76)
- 男 合点しや  
ト見へある 所へ十蔵〔半平〕 富十郎〔お染〕を連れ出テ (P.116)

○四段目切

- 新太郎 桐富〔お作 亀吉〕恵方棚へ火をとぼし居ル見へ 在郷歌にて幕引く (P.140)

- ト富十郎 万四郎〔お染 久松〕セリ下けにてきへる  
返し道具 (P.189)

◆「雷神不動北山桜」寛保2年1月 大坂大西の芝居 名代松本名左衛門 座本佐渡島長五郎

○二ッ目

- 皆々見合 見へよく並ぶ (P.223)

○(「毛拔」の場面) ※ なし

○四ノ切

- ト夫より荒れ立に成 舞台中をめぐり／＼探す 坊主皆々付廻る 此内始終雷鳴る (P.330)  
(※「鳴神」の場に<見得>の記述はない。)

第5巻

◆「傾城室町桜」寛保3年1月 京都四条北側東角大芝居 名代蛭子屋吉郎兵衛 座本坂田市太郎

○中

- ト色／＼立廻りあり 見〔得〕よし  
たぐひなかりけり (P.36)

◆「菊水由来染」寛保3年3月 大坂大西の芝居 名代松本名左衛門 座本中村十蔵

○三ッ目

- ト小平次〔権平〕新九郎〔市蔵〕に切掛ける 引つ外して見へ有て 新九郎ヲ当てる 新九郎伸り転ける 十蔵〔成悦〕小平次が手ヲ捉へ じつと思入して 新九郎ヲじつと見ている 新九郎気付く体 新九郎ヲ見ると次郎三〔忠太〕十蔵に切り掛ける 少し見へ有て十蔵ヲ当てる 十蔵伸る 新九郎次郎三が手ヲ取 脈を見る 十蔵気付く体 (P.139)

◇「大井川三組盃」 寛保3年5月大坂角の芝居 名代福永太左衛門 座本岩井半四郎 ※なし

◆「傾城千引鐘」寛保4年1月 京都四条南側大芝居 名代布袋屋梅之丞 座本中村条太郎

○大初冊

- ト立廻り有 夫より立有 状箱踏みくたく 状引出す 見よふとする 見せまいと有て 狐火にて状読むみへ 此間平九郎〔槌兵衛〕出てのぞき見てはこわがり みへさま／＼有て 兵吉〔民部〕状読む (P.386)

○二ッ目

- ト障子開く 条太郎〔染絹〕琴を弾きて居る(中略)平九郎〔晴久〕花瓶に花を差しているみへ

琴一くさり有 (P.427)

- トばた／＼とする 糸太郎〔蘭丸〕若衆形にて小手臍当にて侍を踏まへ 片手にてねぢ上居る **みへ**にて襖開く 辰三郎菊松兵吉〔貴蝶義澄民部〕並び居る 糸太郎を見て (P.430)
- トつか／＼と行 兩人〔たいら 新九郎〕 **みへ** 四郎太郎〔新九郎〕中へ出る (P.433)

○大切五ッ目

- ト油桶の杓ヲ取り 則此所へト 柄杓にて油を汲み 喜代三〔万代〕外の砂舞台へ物ヲ書く **見へ** 拍子にて式階せり上ゲ 下の座敷体になる 残らず道具かわり 下より四郎太郎〔新九郎〕炬燵にもたれ 伊三郎〔正九郎〕が書た物ヲ見て居る体にてせり上ゲ (P.526)

## 第6巻

◆「昔形吉岡染」延享1年12月～二の替り 大坂中の芝居 名代塩屋九郎右衛門 座本中村十蔵

○上ノ口明

- ト行かふとする すこし **みへ** 十蔵〔正素〕竹刀を取り次郎三〔源蔵〕を打伏せ (P.162)

○二ッ目

- ト刀抜き 少し **見へ**あり (P.206)

○四ッ目切

- ト舞台一面の引道具 向ふ大飾り山 正面に新九郎〔玄法〕大童に成 抜刀松明にて取巻き居る **見へ**さま／＼有つて切込 所へ十蔵〔用助〕走り出 (P.291)

◆「二月堂暁鐘」延享3年3月 大坂中の芝居 名代塩屋九郎右衛門 座本嵐三右衛門

○三ッ目

- ト手を洗ふ 団蔵〔与市〕腰より刀の鞘を出し 新九郎〔嘉忠太〕刀の身へしつくり納る 新九郎柄の方 団蔵鑑 兩人じつと止り **見へ**有て (P.372)

- 小〔お力〕ヤア兄与市様じゃないか

団〔与市〕不所存な妹 用捨はない

ト取て投る **見へ**有て 小六〔お力〕団蔵〔与市〕が足にすがり (P.374)

- ト是より **見へ**有て 奥へ追込 取手皆／＼奥へは入 奥にてばた 〳〵 (P.377)

○五ッ目大切

- 取ふとスルを 手燭を持たる音十郎〔半十郎〕鏡取上ゲ 団蔵〔将鑑〕見る 鏡に映る思入 三十郎〔専助〕手燭を取りさし上ゲ 三人 **見へ**よく見合て (P.425)
- ト覚期して飲ふとスルを三十郎〔専助〕茶碗を取 打付る きつと **みへ** (P.430)

## 第7巻

◆「面影砥水鏡」 延享3年9月 江戸中村座

○四番目下

- トひしぎになり 三人〔半七 お花 松島〕花道へ並び 見へあつて 膝詰にて押し戻す (P.39)
- ト大どろ／＼にて 三人立廻りあつて どこいと止ル (P.39)

◆「大和国井手下紐」寛延2年12月 大坂大西の芝居 名代松本名左衛門 座本三枡大五郎

○二幕目

- 造り物 … 竹刀打の稽古している見へにて幕明る (P.61)
- ト足蹴に三五郎〔有琴姫〕を蹴らふ〔と〕する 立廻りあつて 半四郎〔猪子平〕見へよく 平十郎〔千左〕が足をとらへ 三五郎をかこふ 弥平次〔帯刀〕もみへあり (P.80)
- ト取ふとする腕たゝき落し みへよく当ル (P.83)
- ト又斬りかける 〔浪江〕みへよく止める (P.102)
- ト此内二階の障子さらりと開ける 浪江 平十郎〔橋立 梅吉〕見へよく 金を引張りいる (P.121)

○四幕目

- ト家来掛ル 投げル 〔新蔵〕七右衛門取り付くを よく立廻りあつて 見へよく押ヘル (P.120)

○道行

- ト鏡を持 形を急度映し 水へまた映し振ひ 鏡振り上げル と蛙多く出ル 吹水毒気を吐きかける ト染松〔糸〕きつと見へになり (P.153)

○大切

- ト鞘ゑ嵌めふとする 色／＼あつて鞘ゑ納める 歌右衛門〔大膳〕抜かふとする 大五郎〔築茂〕抜かさぬ様に立廻りあつて 歌右衛門柄を持ち下にいる 大五郎鞘持ち 納めてみゑ (P.179)
- ト立廻り 兩人〔大膳 築茂〕抜き合 くわつしと打つ 見ゑよくあつて (P.180)

◆「けいせい都富士」宝暦2年1月 大坂中の芝居 名代塩屋九郎右衛門 座本中村十蔵 後の加筆あるか

○二ッ目

- トばた／＼にて橋懸りより小舟に水手五六人櫓を押し出ル 金蔵〔才三郎〕舳先に上下股立取り 上を撥ね 鎗の柄の折れたを持つて立つている 見へ有て 船を押し切出ル (P.233)

○三ッ目

- ト立塞がる 三人〔涼阿弥 右内 宇治右〕見へにて 返し (P.262)

○六ッ目

- 造り物 二重舞台 … 歌右衛門〔幸兵衛〕懸樋の血をきつと見て居る見へにて幕開く 奥に琴の相方あり (P.322)

◆「九州苧萱関」 宝暦2年3月 大坂中の芝居 名代塩屋九郎右衛門 座本中村十蔵

## ○三ッ目

- ト豊三〔文蔵〕鞘を〔取り〕十蔵〔左衛門〕持テ居ル刀の身をさす 大五郎〔笹右〕刀の身を十蔵持て居る鞘へさす 両方一度にしゃんと見へよく止まる (P.451)

## 第8巻

◇「諸<sup>ニ</sup>奥州黒」宝暦2年7月 江戸中村座※なし

◇「津国十三渡」※なし

◆「伊達初買曾我」宝暦3年1月 江戸中村座

## ○一〔一番目大詰〕

- 本舞台 瓦屋根の大門明立 … 真中に畳敷 三方に九寸五分をのせて有 右の見へ 能の太鼓にて幕開 (P.78)
- ト組留の見へにて急度成 人寄せにて兩人〔八幡 鬼王〕をせり上る (P.104)  
(※「組留」は夜討ちの五郎と五郎丸の仕方)
- ト謡にて 八百蔵〔五郎〕軍兵を積み重ね 其上に上り 伝九郎〔朝比奈〕鎧を引合 三甫右衛門 半五郎〔梶原 富樫〕両方に突つ立 大勢両方へ別れ 上ミに広次 助五郎〔鬼王 八幡〕組留の見へになり 皆／＼並よくならぶ 和歌にて  
幕 (P.107)

## ◆三〔二番目中幕〕

- ト歌に成 五郎三〔平左〕皆々尻からげ 押肌脱ぎ 思ひ入して花道へ行 と向ふより 助五郎〔源兵衛〕男作の形にて栄螺殻を持て 思ひ入して出る 跡から若ひ衆大勢 棒や割木杯を持て 助五郎を討たんと付けて出る 五郎三皆々思ひ入してかゝるを 助五郎栄螺殻を振上 急度見へ 五郎三皆々恐がり跡へ退る と後口から若ひ衆思ひ入する と助五郎振返り急度する 若ひ衆恐がり跡へ退る事有て じり／＼と本舞台へ来る (p.153)

## 第16巻

◆「<sup>おんななるかみ</sup>三髪 歌仙桜」宝暦12年3月 大坂角の芝居 名代福永太郎左衛門 名代中山文七

## ○五ッ目大切

- ト釣鐘三重に成 大雷にてお三輪髪逆立 大手を広げ行かける ト向ふより黒雲竜神の形 竜の頭 十二単にてつか／＼と出 花道のまん中にて急度見へ有て お三輪と睨み合 本舞台へ付いて来る  
此間大どろ／＼ かけり 一所にて本舞台にて 兩人急度詰合 (P.552)  
(※鳴神に押戻が出る演出として興味深い。)

(第30巻)



## ◆「御摂勸進帳」安永2年11月 江戸中村座 (本文・頁は岩波新大系本)

## ○第一番目三建目

- 本舞台三間の内正面翠簾 … 幕の内より半三 広袖衣装 直平頭巾 大口 土佐坊の<sup>見へ</sup>にて 馬に乗り 松明をかりげて居る 雷蔵上下衣装にて股立をとり その馬の尾筒を取りて控へ居る 若い衆大勢軍兵の形りにて松明を振りて扣へ居る 昌俊の謡 どん／＼にて幕明く (P.82)
- ト是より早笛になり 半三・雷蔵 馬引の様なる<sup>見へ</sup>有て よい程に馬より引おろす 是より若い衆雷蔵にかゝる と立廻りあるべし 此うちに (P.83)
- ト又今様始りと呼ぶ 是より所作の鳴物になる 此鳴物をかりて又太郎市松奥へは入る と直に正面の御簾を巻上げさせて 結構なる山台の上に紅葉を大ぶん飾り付け 後ろの方に段幕を張り 紅葉狩の<sup>見へ</sup> 是に門之助羽織衣装にて中啓を持ち 左の肩に長絹を懸け眠りて居る <sup>見へ</sup> 雄次郎打掛衣装にて般若の面と錫杖を持ち 上の方に立て居る<sup>見へ</sup> 是を押し出して 誂の所作色／＼あるべし  
むつの花紅葉 梔狩 (P.95)
- ト是より三味線入太鼓 賑やかなる相方になり 雄次郎吉次花軍の立 門之助行事の様なる事色／＼あり 取組いろ／＼あるべし … と門之助池の傍へ来て水を汲ふとして 池をきつと見て 思入れして<sup>見へ</sup>になる 本ノ神楽に成り (P.104)
- ト太鼓謡になり 少長長上下にて出て来る 純右衛門を突き退け門之助を囲つて しやんと<sup>見へ</sup>に成る (P.111)
- ト太鼓入りのとひよに成り 団十郎舞台へ来る 若い衆敵役残らず立廻り有て 皆々を囲ひ 仲蔵又太郎が中へしやんと<sup>見へ</sup>になる (P.131)

## ○第一番目四建目

- 本舞台三間の内 一面に山組の景色にて 左右の柱紅葉の立木 鏡板より豊志太夫連中<sup>見へ</sup>能く並ばせ 正面より下げ降ろす 近年になき道具の物すきに 前弾きよりすぐに浄瑠璃に成る (P.153)
- ト此浄より切ると鳴物入りの相方になり 幸四郎真ん中に広袖衣装 羽織の形りにて煙管を持ち 小サ刀の形りにて 紫の頭巾を頭に置き 張り肘をして馬に乗て居る 此馬木蘭張りにて綺麗にして この東の方に半四郎 女馬士にて 広振り袖の形り 脱ぎかけ 頬かむりをして 手綱を鞭にして立て居る 西の方に広次 真赤く塗つて奴の形りにて 岩台に腰をかけ 紅葉の枝に塗り樽を付けて担いで 左りの手に大津火縄を持っている 此<sup>見へ</sup>にて三人をせり上げる (P.154)

## ○第一番目五建目 (芋洗い) ※なし

## ○第一番目六建目

- 本舞台三間の間 富樫の左衛門館の体 … 歌川 亀之助 重八 何れも打掛衣装にて目隠しをして居る<sup>見へ</sup> 騒ぎにて幕あく (P.208)
- ト広次抜いて切りつける 手ばしかく立廻りあつて 其内に崎之助四立目の玉鶏の印の袱紗包を懷より取り落す 広次それを取りあげて兩人きつと<sup>みへ</sup>になる (P.235)

- 染五郎 何がなんと  
友右衛門 後の参会  
団十郎 行家殿  
友右衛門 家直  
三人 さらば

ト見へになり染五郎奥へ入る 友右衛門七三郎を連れて花道へ入る … (P.278)

- ト里好つか／＼と来て肌を脱ぐと 片袖のなき脱ぎかけとなり きつと見へになる (P.288)
- トむね打ちに打つ どろ／＼にて苦しみながら 玉鶏の印を牛王の上え取り落とす と焼耐火燃ゆる とたんに庭鳥の声を発する と大どろ／＼になり 里好は鶏の声を聞て鶏の見へになる 崎之助は焼耐火を見て鳥の脱ぎかけとなる 団十郎両方をきつと見て (P.290)

○第一番目七建目大詰

- 広次 力と  
又太郎 力の  
兩人 力くらべだ

ト是より太太鼓入りの合方になり 兩人いろ／＼立あるべし と花道より引台に乗り 舞台へ引もどし しやんと見へになる どん／＼にて向ふより勘左衛門馬に乗り… (P.310)

- ト立廻りあると 向ふより雷蔵 大広袖の衣装にて出てきて  
雷蔵 …

ト立廻りあつて しやんと見へになる

勘左衛門 やれ討つて取れ

皆々 やらぬは

団十郎 雄次郎 門之助 やみなん／＼

ト是より流しになり 正面の山幕を引き上ると 真ん中に団十郎 石の不動の見へ 左右に雄次郎門之助 金伽羅制タ迦の見へにて押し出し 太鼓打上げる (P.311)

(※石の不動の演出)

- ト是より太鼓寄せにて 広次又太郎鎧を引合てまん中に立つ 雷蔵若衆を積み重ねて 下の方にその上に乗り 小さき三升の紋の扇を開き煽ぐ 少長上の方へ直る いづれも見へよく並ぶ (P.316)

○第二番目

- 本舞台三間の間 一面の障子屋体 … 雷蔵綱蔵 奴の形にて廂の雪を搔いて居る見へ ちよん／＼にて幕明く (P.318)

(※本文は岩波新大系による。ただし句読点は空白に改め、若干削除した。)

(※「御摂勸進帳」が圧倒的に多いのは全幕の台帳が残っているためか。)

第 36 巻

- ◆「国色和曾我」安永 7 年 2 月 江戸中村座

○二番目序幕（茜染野中の隠井）

- 本舞台 浅草観音の地内 … 此下に幸四郎〔鬼王〕深編笠の浪人 袖乞の形にて莫蔭の上に座つて居る 半四郎〔おしげ〕振袖絹やつしにて 行来の仕出しに錢を貰つて居る見へ 仕出し大勢花道よりも下座よりも出て行違 辻打にて幕明 半四郎に錢を遣る (P.230)

## ○二番目中幕

- トかゝる 三津五郎〔小五郎〕提灯をさし出ス 広右衛門〔武兵衛〕これを切落し 兩人激しき立廻りあつて よい見へをきつけに ちよん／＼／＼／＼／＼  
拍子幕 (P.250)
- ト立廻りあつて  
友 門〔市郎兵 長吉〕どつこい  
ト見へになる 東西の揚幕にて  
三津 広右〔小五郎 武兵衛〕待つた (P.259)
- ト互いに抜き合わせ切結び とゞ広右衛門〔武兵衛〕三津五郎〔小五郎〕が脇差しを打ち落し 直ぐに切付る その刃物を留めてみへになり (P.262)
- ト詠の唄〔に〕なり 簾上がる と三津五郎〔小五郎〕鏡台に向い煙草のんで居る 此後に下り 条次郎〔喜瀬川〕傾城の裃襦袢の形にて 櫛を持ち髪梳きの見へ 七三郎国太郎〔田毎 さなへ〕禿にて茶をこしらいて居る (P.272)
- ト半四郎〔重の井〕を広右衛門〔武兵衛〕押さへる 皆／＼幸四郎〔鬼王〕をさん／＼にぶつ 奥より三津五郎〔小五郎〕出て 皆／＼を突き退け 兩人を囲つて見へ (P.303)
- ト障子へ血汐かゝる 此血汐簀へ伝い 手水鉢へ流るゝ 最前友右衛門〔市郎兵〕が置たる簀の鶏声を発す これに合せて方／＼にて鶏の声する 障子上る と三甫蔵〔儀平次〕七三郎〔経若〕を抱へて居 条次郎〔喜瀬川〕三甫蔵を挾つて居る見へ (P.323)
- ト七三郎〔経若〕を廻し 高麗蔵〔乙松〕が首を打ち 突つ立てみへ (P.324)
- トかゝる 立廻りにて 幸四郎〔鬼王〕しやんと隔て 皆／＼見へにて  
〔鬼王〕 動くな  
まづ今日はこれぎり (P.324)

## 第 43 卷

◇「玉櫛笥粧曾我」延享 4 年 1 月江戸市村座 ※なし

## 第 44 卷

◇「仇名かしく」 安永 6 年 7 月江戸森田座二番目 ※なし

## 第 45 卷

◇「契情鸚鵡石」 元文 3 年春京都四条南側西角大芝居 名代都万太夫 座本中村若太夫 ※なし

(参考)『日葡辞書』

Miye,uru,eta. ミエ,ル,エタ (見え,ゆる,えた)

現れる。または, 見える。